高大連携アフガニスタン招聘プログラムをいかした家庭科の授業実践

家庭科　　小清水　貴　子

筑波大学では、2003 年度よりアフガニスタンから職業教育の専門科を招聘しており、本校でも特別プログラムを開催している。生徒にとっても異文化に触れて生活文化を学び、自己の生き方を考えるよい機会であり、本招聘プログラムを取り入れた授業を実践した。生徒のプリントや、授業から半年経過後のアンケート調査を分析した結果、アフガニスタンの生活を学ぶことは、生徒が自分自身の生活を見つめ直すことにつながっていた。

キーワード：高大連携　総合学科　アフガニスタン　家庭科

1．研究目的

筑波大学農林技術センターでは，1974 年以来，日本ユネスコ国内委員会と共催して「筑波アジア農業教育セミナー（TASAE）」を毎年開催している。総合学科である本校においても，TASAE の農業教育の視察を受け入れ，学校教育内容や授業・実習の参観，本校の教育の実践報告を行っている。家庭科では生徒が歓迎パーティを企画し，参加者とともに歓談する機会を設けている。

2002年度のTASAE参加者から，アフガニスタンの復興には高等学校教育レベルにおける職業教育が極めて重要であることが指摘され，これにより 2003 年度からアフガニスタンから職業教育の専門家を招聘して，本校で特別プログラムを開催している。

2005年度は女性の小学校教員を招聘した。アフガニスタンでは依然，女子児童を使った絨毯産業が行われており，女子の識字率は低く，成人女性の社会進出は皆無に等しい。そこで，本校の教育的資源を利用して，アフガニスタンの女子教育に貢献することになった。本校の生徒たちにとっても，異文化に触れ，自己の生き方を考えるよい機会であることから，本プログラムを活用した授業を実践することにした（図１参照）。

そこで，本研究では，家庭科におけるアフガニスタン招聘プログラムを取り入れた授業の可能性を明らかにすることを目的とする。

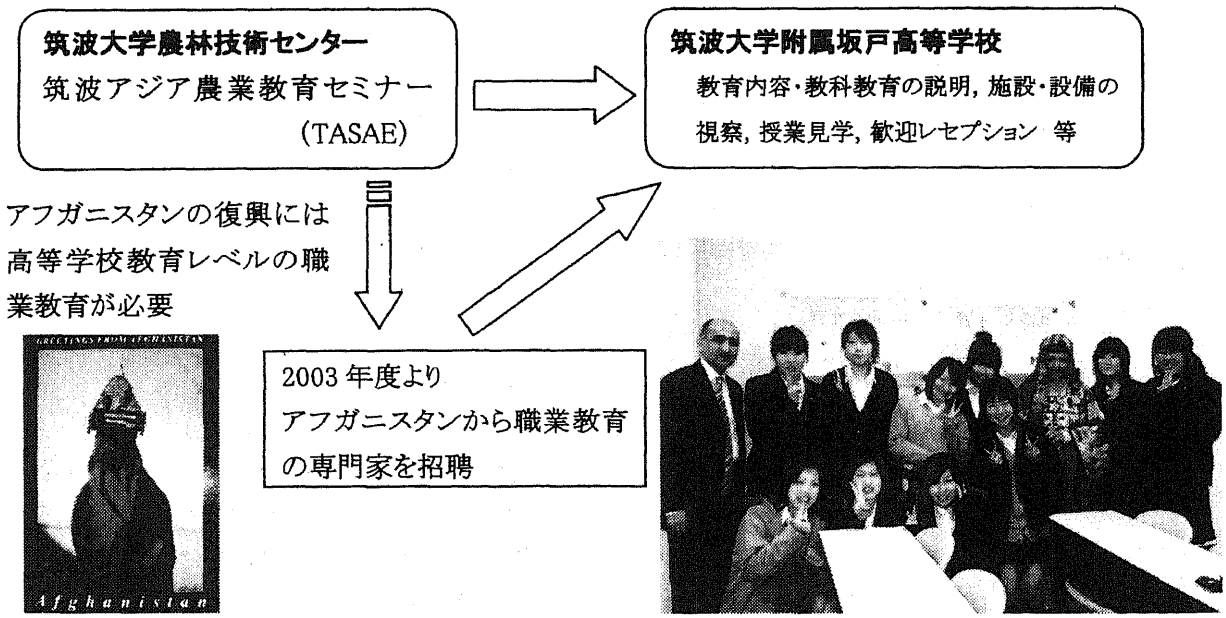


図1　高大連携アフガニスタン招聘プログラムの流れ

2．研究方法

(1)本実践の位置づけ

本校では，１年次で「家庭基礎（２単位）」を履修する。２・３年次からは，各系列の授業がメインになる。家庭・福祉の科目が多く開講されている生活・人間科学系列の生徒は，福祉・保育モデル，フードデザインモデル，アパレルモデルの３つのモデルに分かれて，科目選択を行う。本授業は，生活・人間科学系列の２年次系列必修科目である「生活・人間科学」で行った(表１参照)。

表1　本校で設置している家庭科関連の科目

平成 17 年度入学生(単位数)

1年次	家庭基礎(2)		
	福祉・保育	ﾌｰﾄﾞﾃﾞｻﾞｲﾝ	ｱﾊﾟﾚﾙ
2年次	生活・人間科学(2)・栄養(2)		
	福祉基礎(2) ﾊﾟﾌｫｰﾏﾝｽ･ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ(2)	ﾌｰﾄﾞﾃﾞｻﾞｲﾝⅠ(4)	ｱﾊﾟﾚﾙ技術Ⅱ(4)
3年次	発達と保育(2)・ｱﾊﾟﾚﾙ・ｸｯｷﾝｸﾞ(2)		
	福祉演習(2) 福祉演習(2)	ﾌｰﾄﾞﾃﾞｻﾞｲﾝⅡ(4)	ｱﾊﾟﾚﾙ技術Ⅱ(4)

系列必修科目「生活・人間科学」は，「人的資源と経済的資源のかかわりを考え，自分の人生を創造する力を養う」ことを目的である。年間を通した学習項目は表２に示した通りである。

表2　本実践の位置づけ

	人的資源と経済的資源のかかわりを考え，自分の人生を創造する力を養う		
	1学期	2学期	3学期
生活・人間科学	他者とともに生きる	自立して生きる	社会とつながる
	ﾗｲﾌｽﾃｰｼﾞと発達課題 ジェンダーと性 家族と家庭生活 ﾍﾟｱﾚﾝﾃｨﾝｸﾞと人間発達	働き方と職業選択 労働と家庭生活 家庭経済のしくみ 貯蓄と保険	生活文化と暮らし 資源と環境 個人と社会のかかわり

【本実践】アフガニスタンの歴史・文化・生活を知り，個人の生活と社会とのかかわりを考える

１学期は「他者とともに生きる」，２学期は「自立して生きる」，３学期は「社会とつながる」を大きなテーマにした。本実践は，３学期の「生活文化と暮らし」で，「アフガニスタンの歴史・文化・生活を知り，個人の生活と社会とのかかわりを考える」ことをねらいとして位置づけた。

(2)実践した授業の概要

本授業は，2006年2月，「生活・人間科学」を履修する２年次の生徒を対象に，全６時間で行った（図２参照）。

○科目…生活・人間科学　（系列必修科目）
○単元…生活文化と暮らし
○対象生徒…２年次64名（男子8名・女子56名）
○実践時期…平成18年２月３日・10日・24日

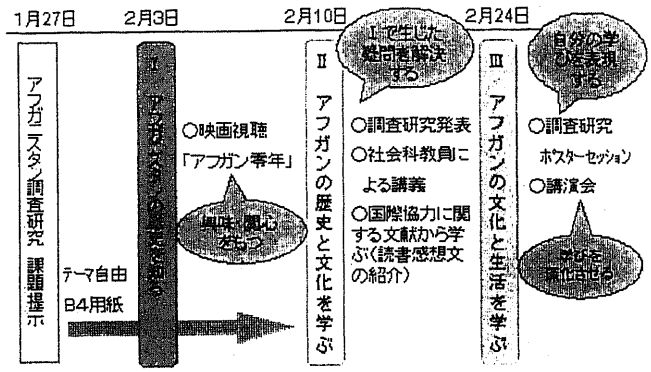


図2　本授業の概要

授業に入る前に，生徒全員にアフガニスタンに関する調査研究の課題を出した。第１回の授業では，「歴史を知る」をテーマに，映画「アフガン零年」を視聴し，アフガニスタンに関心を持たせることをねらいとした。第２回は，「歴史と文化を学ぶ」をテーマに，調査研究発表，社会科教員による講義，国際協力やアフガニスタンに関する文献から，現状を知り，映画で感じた疑問の解決を目指した。第３回は，「文化と生活を学ぶ」をテーマに，アフガニスタンからみえたシャハラさん（小学校教諭，女性，46 歳）をお招きして，調査研究ポスターセッションを行った。その後，シャハラさんの講演会を行い，アフガニスタンについてより深く理解することを目指した。

(3)データの収集と分析

本研究では，授業で生徒が記述したプリント，生徒が作成した調査研究レポートをデータとして用いた（表３参照）。プリントに書かれた記述は，ＫＪ法を援用してカテゴリー化して分析した。また，各授業で教師による直接的観察法を通して，生徒の反応や変容を探った。また，本授業から約半年が経過した後に，生徒に本実践に関するアンケート調査を実施した。以上のデータから，本授業の実践と高大連携プログラムを活用した授業の可

能性について検討を行った。

表3 分析に使用したデータ　　（有効回答率）

	男子	女子	全　体
Ⅰ）映画視聴記録	8	54	62（96.9%）
Ⅱ）調査研究	6	48	54（84.4%）
Ⅲ）講演記録	8	56	64（100%）
Ⅳ）半年後ｱﾝｹｰﾄ	7	47	54（84.4%）

3．研究結果および考察

(Ⅰ)アフガニスタンの歴史を知る

第１回は「アフガン零年」の映画視聴を視聴した。この映画は，2003年にセディク・パルマク監督により製作されたものである。映画のあらすじは以下の通りである。タリバン政権下では，女性が身内の男性を同伴せずに外出すると刑罰が加えられる。つまり，男性がいないと仕事に出られず，生活の糧を失うことになる。一家の男性を失った祖母・母親・少女の家庭は生き延びるために，母親は少女を少年の姿に変えて働きに出すことを思いついた。ある日，街のすべての少年がタリバンの宗教学校（マドラサ）に召集され，少女も連れて行かれる。コーランの授業や身の清め方など，少女は必死の思いでやり過ごすが，少年たちに女であることを怪しまれ，騒がれる。タリバン兵が，少女を井戸に吊るして罰を加える。恐怖による衝撃から，少女に初潮が訪れた。少女であることが暴かれ，少女は宗教裁判にかけられる。少女は権力を有する老人に引き取られ，老人の妻の一人として生きていくという内容の映画である。

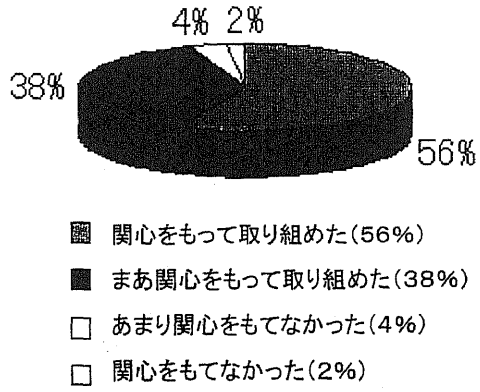
日本語字幕での視聴で，テーマも大変重く，生徒に受け入れられるのか心配であったが，波を打ったように教室が静まり，休憩なしで集中して観ていた。

視聴記録には，感想とともにたくさんの疑問が出てきた。「タリバンとは何か」「なぜ女を嫌うのか」など，タリバンに関する疑問が最も多かった。この他には「なぜ政府はタリバンから国民を助けないのか」「宗教にこだわるのはなぜなのか」「男性を失った家族はどうやって生きていくのか」「現在の暮らしはどうなっているのか」「映画のタイトルの意味は何か」「映画のラストシーンで，少女が牢屋で縄跳びをしているシーンの意味は何なのか」など，映画の衝撃とともに，たくさんの疑問があがり，生徒の関心の高さがうかがえた。

学習から半年後のアンケート調査では，９割以上の生徒が「関心をもって取り組めた」と回答し，印象深かった様子であった（表４参照）。

自由記述では，「女の子なのに，男の子になりすましてまで働くほど貧しさ。そして，女の子だというだけで罰を与えられる。そういう環境に対して，とても悲しくなり，どうしたらよいのか，いろいろ考えた。」「あまりにも内容が衝撃的だった。想像を超えたものだった。私たちが平和に暮らしている今でも，戦争は起きているのだという事実を感じた。」「最初は興味がなかったが，途中から熱中して見ることができた。私たちの知らないアフガンについて知ることができた。」など，半年経過後も多くの記述が見られた。

表4 映画「アフガン零年」について　　（N＝54 人）



(Ⅱ)アフガニスタンの歴史と文化を知る

第２回は代表の生徒が調査研究を発表した。54名の生徒が課題を提出し，テーマは，「生活・文化・産業」に関するものが最も多かった（表５・図３参照）。

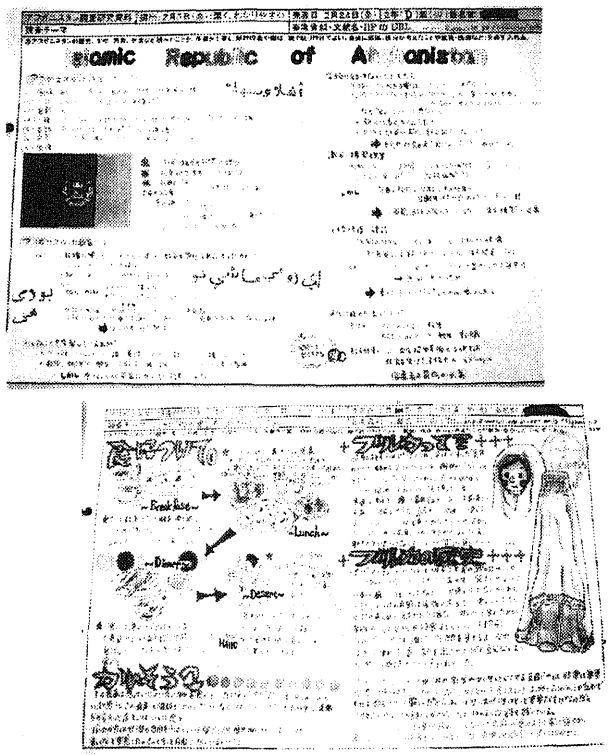


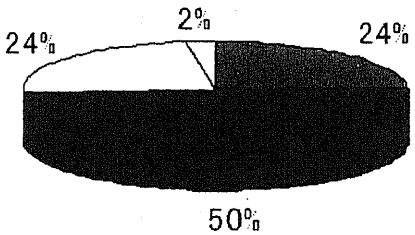
図３　生徒のレポート例

アフガニスタンの医療をテーマにした生徒は，「女性医師が派遣されたことにより，女性の病気発見率が上がり，治療ができるようになったということがわかった」，またアフガンの子どもたちをテーマにした生徒は，「私たちは洋服に困ることなく普通に暮らしているが，アフガンの子どもたちは冬がどんなに寒くても，暖かい洋服が着られず，少ない物資に頼ることしかできない。私たちはどれだけ贅沢なのだろうと思った。」とそれぞれ感想を述べていた。音楽に関心のある生徒はアフガニスタンの音楽を，また将来，福祉系の進路を希望する生徒は子どもの福祉をテーマにするなど，生徒それぞれが自分の関心のある分野についてまとめていた。

表5 アフガニスタン調査研究のテーマ分類

	人数
生活・文化・産業に関するレポート	16
女性・子どもに関するレポート	13
歴史・政治・経済に関するレポート	11
民族・宗教・戦争に関するレポート	9
医療に関するレポート	3
その他	2

表6 アフガニスタン調査研究について （N＝54人）



■ 関心をもって取り組めた(24%)
■ まあ関心をもって取り組めた(50%)
□ あまり関心をもてなかった(24%)
□ 関心をもてなかった(2%)

半年後のアンケート調査では，7割の生徒がこの学習活動に「関心をもって取り組めた」と回答した（表6参照）。

しかし，関心をもって取り組めた生徒は第1回目に比べると少なかった。「関心をもって取り組めた」と回答した理由としては，「自分で調べることによって，より深く知ることができた。」「自分の興味ある分野のレポートを作成することができた。」「調べていくうちに，たくさんの疑問に思うことが出てきた。」等であった。「あまり関心を持てなかった」と回答した生徒の大半は，「調べたい内容の文献が少なくて，あまり調べることができなかった。」「資料が少なくて，難しかった。」という理由をあげていた。

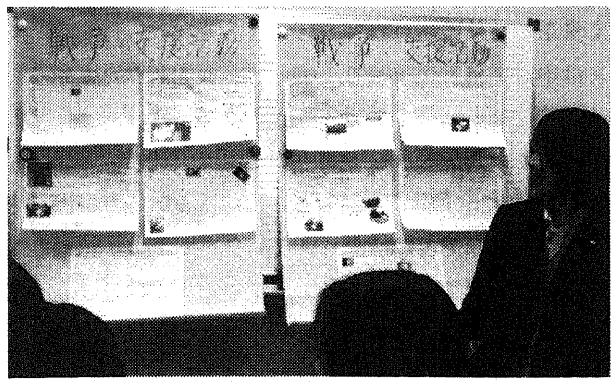
また，この調査研究発表の後，アフガニスタンについて本校の社会科教員による講義を行った。前回，視聴した「アフガン零年」をみて生徒が感じた疑問点を中心に話をしてもらった。他教科の教員が授業にかかわることにより，生徒は授業に新鮮さを感じていた。また，生徒とともに教員も，アフガニスタンの歴史や政治的情勢について理解を深めることができるよい機会になった。

その後，日本のアフガニスタンに対する国際協力に関する文献を取り上げた[1) 2)]。本授業で活用した『アフガニスタンに住む彼女からあなたへ』は，平成18年度の青少年読書感想文コンクール2005の課題図書であった。本授業を受講している生徒の中に，埼玉県青少年読書感想文コンクールに入賞した生徒がおり，授業でその生徒が読書感想文を発表した。アフガニスタンのことを知るだけでなく，生徒一人一人が自分に何ができるかという視点をもたせる機会にした。

(Ⅲ)アフガニスタンの文化と生活を知る

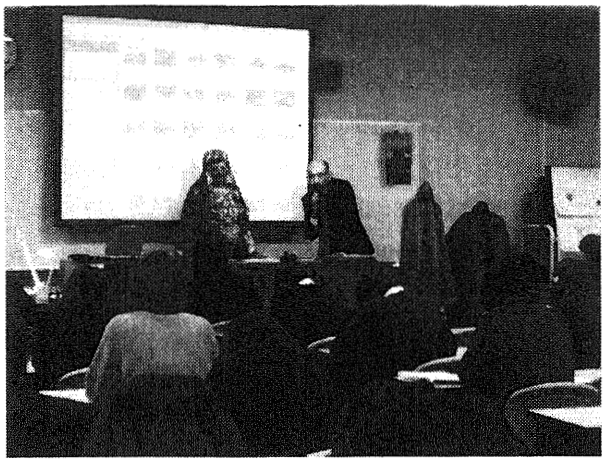
第3回の調査研究ポスターセッションでは，調べたことを他の生徒やシャハラさんに発表した。自分たちが調べたことに対して，実際はどうなっているのか，現地の生活の話を聞いたり，調べきれなかったことについて質問する姿がみられた（写真1参照）。

写真1 ポスターセッションの様子



ポスターセッション後に，シャハラさんの講演会を実施した（写真２参照）。ポスターセッションで，生徒との間に共通理解が生まれ，話題が広がり，生徒も積極的に講演を聞いていた。

写真２　講演会の様子



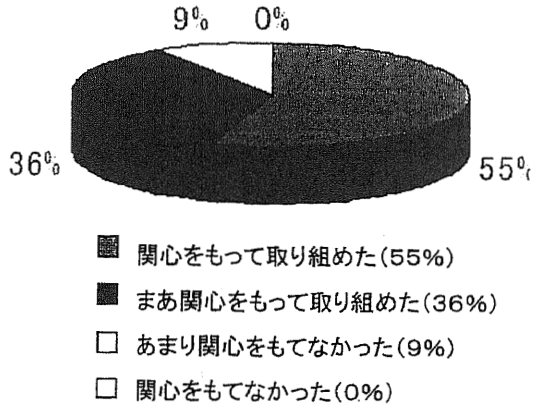
生徒の感想をみると，「アフガニスタンの女性にとってブルカは一生手放すことができないもの。実際に私も着てみて，冬なのに中は暑かった。夏ではもっと暑いのだと考えるだけでとてもつらい。ブルカは頭の部分が小さくて，かぶると痛かった。」，また別の生徒はアフガニスタンの子どもたちについて，「学校に行ける子どもは少ない。学校に行けても，施設が整っていない。机も椅子も無く，テントで勉強している。校庭がなく，球技をして遊べない。子どもも働きに出されている。とくに女性は，タリバン政権で教育を受けなくてもよいとされていたので，私たちと同じ年齢，もしくはそれ以上の人たちでも読み書きができない人がたくさんいる。同じ地球に住んでいるのに，こんなにも違う。」，また，別の生徒はアフガニスタンの生活について，「戦争の痕が数多くあり，まだ復興できていない。貧しい家では１日に３食食べられない。水道が無く，井戸がいくつかあるが，衛生状況がよくない。伝染病も多いが，病院も整っていない。また，女性は好きな人とは結婚できず，親が結婚相手を決めることがわかった。」という感想があった。講演の内容は多岐に渡ったが，生徒たちは事前に調べ学習を行っていたことから，それぞれ関心をもって聞くことができたといえる。

半年後のアンケート調査では約９割の生徒が「関心をもって取り組めた」と回答していた（表７参照）。

その理由として，「アフガニスタンの状況がよくわかり，自分に何ができるか考えさせられた。」「民族衣装はとても興味深かった。本や絵ではわからないこともあり，勉強になった。」アフガニスタンの現状について学ぶことができた。実際にブルカも初めてみた。みどりの干しぶどうがおいしかった。」などがあった。

表7　アフガニスタン講演会について

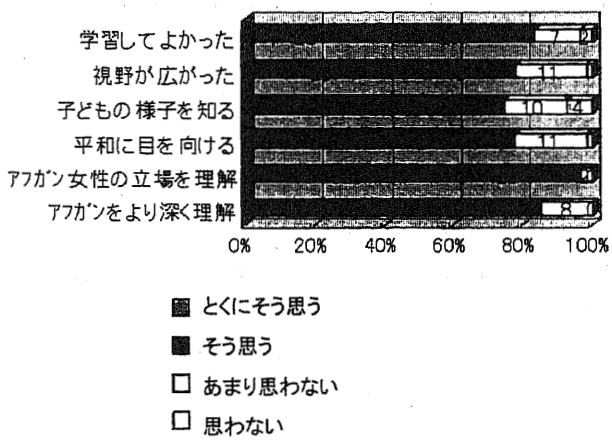
（N＝54 人）



(Ⅳ)学習活動全体を通して

学習活動全体について，半年後にアンケート調査では，「学習活動をしてよかった」と回答した生徒が全体の84％を占めた（表８参照）。

表8　アフガニスタンの学習全体について　（N＝54 人）



また，生徒が「学ぶことができた」と回答した項目は，「女性の立場について知る」「アフガニスタンについて理解を深める」「自分の視野を広げる」「子どもたちの様子を知り，自分の生活を見直す」「平和な社会を実現させることの意味を考える」の項目の順であった。全体の78.2％の生徒が，こうした学習の機会があるのは，大学附属のメリットであると考えていた。

４．まとめと今後の課題

本実践の導入で用いた映画「アフガン零年」の視聴は，生徒の興味・関心を引きつける教材として有効であった。しかし，タリバン政権の一側面をクローズアップした映

画であることから，映画に取り上げられたことがアフガニスタンの全体像であるという誤解を生徒に与えないように，他の側面についても伝える必要がある。

アフガニスタン調査研究については，２学期の授業で，将来の進路を考える職業調べとして「生活・人間科学系列にかかわる 64 の仕事」というテーマで一度，調査研究に取り組んでいたこともあり，比較的スムーズに行うことができた。生徒の感想にも，「私たちが恵まれた状況にいることを当たり前と思わず，胸にしっかり留めておかなくてはならない。」「同じ人間なのに，生まれた国によってどうしてこんなに差があるのかと思った。みんなが幸せになることはすごく難しいことなんだと感じた。自分ができる国際協力について考えていきたい。」とあり，アフガニスタンの生活を学ぶことで，自分たちの生活をみつめることにつながったといえる。

映画と講演会については，授業実施から約半年が経過した後も，生徒の中に学習活動が印象深く残っていることがわかった。しかし，調査研究については，レポートのできがよかった生徒が，必ずしも本人の印象に残っているとは限らないという結果が得られた。

教員からみると，考察を行い，レポート作成に多くの時間をかけたと思われる生徒がいたが，半年後のアンケート調査では，「調査研究は印象に残っていない」と回答していた。授業実施者としては驚きであった。本人に聞くと，他の授業の課題も抱えた状況で作成したレポートであり，記憶に残っていないということであった。詰め込み過ぎで消化不良を起こしたケースだといえる。授業実施時には，授業への取り組み度が高いと思われる生徒であっても，授業実施から半年後には印象に残っていないことがあることも，今後，授業を実践していく上で考えていかなければならない。

以上をふまえて，高大連携プログラムを活用した授業の可能性について考察する。

招聘により，実際にその国で生活している生活者の生の声を聞くことは，生徒の理解を深める上でとても貴重な体験である。また情報が氾濫する現代社会の中で，伝えられている情報と伝えられていない情報があることを，生徒自身が実感できる機会にもなる。

しかし，招聘には経済的問題があり，持続可能なプログラムではないという点に不安がある。それと同時に，招聘時期や，授業との兼ね合いなどの課題をクリアしなければならない。だが，一教科でこのような機会を設定できないため，大学と連携したプログラムを活用して，生徒の学習機会の幅を広げることが必要であると考える。とくに，家庭科は，多様な素材を授業に絡められる可能性を秘めた科目である。今後も大学との連携を強め，附属学校のメリットを授業に生かしていきたい。

なお，本研究は，平成18年度全附連高等学校部会教育研究大会第48回研究大会（2006(H18)年10月20日，奈良女子大学附属中等教育学校）において口頭発表を行った。

参考文献

1） 山本敏晴，2004，望まれる国際協力の形　アフガニスタンに住む彼女からあなたへ，白水社
2） アスネ・セイエルスタッド，江川紹子訳，2005，カブールの本屋，イーストプレス